対話をデザインする――伝わるとはどういうことか (2)

ちょっと余談になりますが、カルチャーセンターの講演会や大学の講義などでも、こうしたモノローグはよく見られます。本来、聴衆や学生に語りかけているはずなのだけれど、実際は、自分の関心事だけを自己満足的にとうとうと話している、これはまさにモノローグの世界ですね。

これに対して、ダイアローグとしての対話は、常に他者としての相手を想定したものなのです。自分の言っていることが相手に伝わるか、伝わらないか、どうすれば伝わるか、なぜ伝わらないのか、そうしたことを常に考えつづけ、相手に伝えるための最大限の努力をする、その手続きのプロセスが対話にはあります。

対話成立のポイントはむしろ、話題に関する他者の存在の有無なのではないかとわたしは考えます。実際のやりとりに他者がいるかどうかだけではなく、話題そのものについても「他者がいる話題」と「いない話題」があるということなのです。つまり、その話題は、他者にとってどのような意味を持つかということが対話の進展には重要だということです。

したがって、ダイアローグとしての対話行為は、モノローグのおしゃべりを超えて、他者存在としての相手の領域に大きく踏み込む行為なのです。

言い換えれば、一つの話題をめぐって異なる立場の他者に納得してもらうために語るという行為だともいえますし、ことばによって他者を促し交渉を重ねながら少しずつ前にすすむという行為、すなわち、人間ならだれにでも日常の生活や仕事で必要な相互関係構築のためのことばの活動だといえるでしょう。

では、このようなダイアローグとしての対話によって人は何を得ることができるのでしょうか。あるいは、今、対話について考えることは、わたしたちにとってどのような意味を持つのでしょうか。

まずあなたは対話ということばの活動によって相手との人間関係をつくっています。

その人間関係は、あなたと相手の二人だけの関係ではなく、それぞれの背負っている背景とつながっています。

その背景は、それぞれがかかわっている※コミュニティと深い関係があります。

相手との対話は、他者としての異なる価値観を受け止めることと同時に、コミュニティとしての社会の複数性、複雑さをともに引き受けることにつながります。

だからこそ、このような対話の活動によって、人は社会の中で、他者とともに生きることを学ぶのです。

このように、対話は、個人と個人が何かの話題について話し合うことだけではなく、それぞれの個人がことばを使って自由に活動できる社会の形成へという可能性にもつながっていきます。なぜなら、ことばを使って自分の考えていることを他者に伝えるという行為は、自分自身の個人的な私的領域から他者という未知の存在へ働きかける公的領域への行為だからです。

（細川英雄『対話をデザインする――伝わるとはどういうことか』筑摩書房 による）

※コミュニティ……共同体、地域社会。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線部「プロセス」の意味を選びなさい。

ア 意味　イ 過程　ウ 傾向（けいこう）　エ 目標　［　　］

(2) 「ダイアローグとしての対話」について正しく述べたものを選びなさい。

ア 対話が成立するためには、話す話題が相手にとってどのような意味を持つかが重要である。

イ 対話で他者が存在する話題を扱う（あつか）ときは、相手の領域に踏み込まないように注意すべきである。

ウ 対話の進展には、話題について、自分と相手が同じ立場で語り合うことがポイントである。

［　　］

(3) 本文の内容に当**てはまらないもの**を選びなさい。

ア モノローグは、常に他者としての相手を想定し、自分の言葉が相手に伝わるかを意識することにつながっている。

イ ダイアローグとしての対話は、ことばの活動を通じて相手との人間関係を築くことにもつながっている。

ウ 対話を通してつくられた人間関係は、自分と相手だけではなく、それぞれが背負う背景ともつながっている。

［　　］